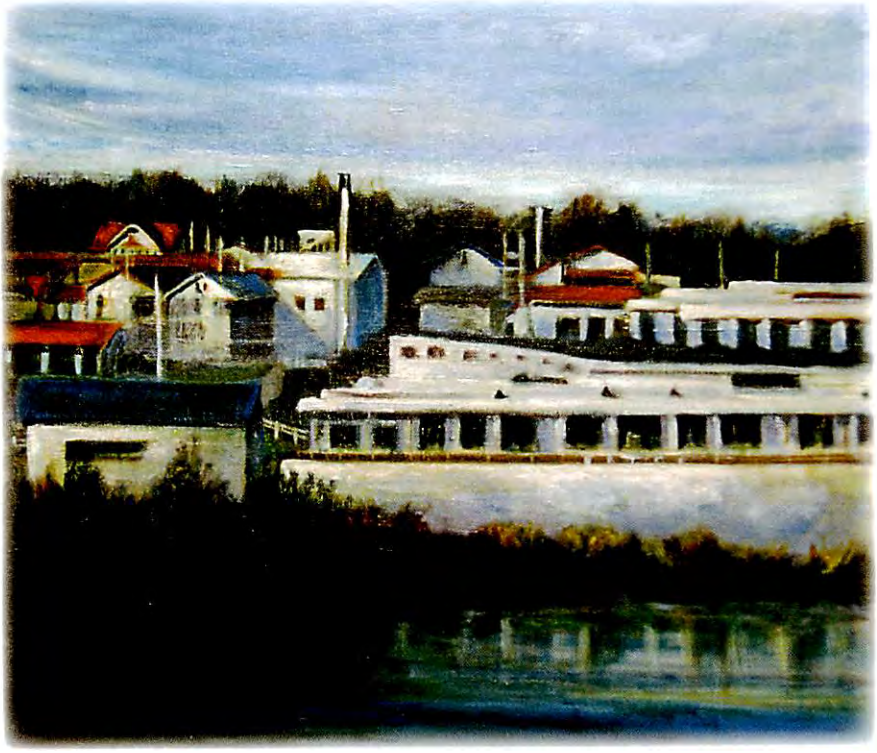
甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2014

3号

松丘保養園の機関誌

表紙絵について

『望郷』（油絵）高橋絹子（青森市所蔵）

この絵は、松丘保養園入所者 故 栂瀬五郎氏が昭和後期に撮影した写真（下）を見て描いた作品です。

故人は、生前に「保養園の全貌が見える場所、三内霊園の沼の淵から、故郷の山形を思い出して撮った写真だ。保養園の前の沼の雰囲気が故郷に似ているんだ。そして、第二の故郷である松丘を撮っておきたいんだよ。」と話されていました。

栂瀬氏の妻である、故　宮本良子氏が遺品整理をしている時、「この写真は出品して入賞したんだよ。思い出ある写真を形に残したいな。」と呟いたのを聞き、その願いを成し遂げるべく、私がこの二人の想いを載せてこの作品を描きました。

そして、タイトルは迷うことなく「望郷」とさせて頂きました。

高橋絹子（松丘保養園　看護師）

平成26年8月談

故　栂瀬五郎氏撮影

甲田の裾　平成26年3号　目次

平成26年度敬老会　お祝いのことば
…… 松丘保養園　園長　川 西　健 登 … 2

平成26年度敬老会　ご挨拶
…… 入園者自治会　会長　石 川　勝 夫 … 4

随想　一木一草（いちもくいっそう）あれやこれや（2）…… 滝 田 十和男 … 6

思い出 …… 山 本　信 彦 … 12

短歌　白樺短歌会 …… 16

米寿を迎えて …… 三 浦 喜美子 … 18

野の花の微笑み(10) …… 比 良　信 治 … 21

人事異動 …… 27

ニューフェイス紹介 …… 28

自治会日誌・編集後記 …… 30

表紙　油絵「望郷」高橋絹子（青森市所蔵）
写真提供　福祉室

「甲田の裾」バックナンバー（平成24年1号～）は
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ
http://www.nhds.go.jp/~matuoka/

お祝いのことば

松丘保養園　園長　川　西　健　登

うららな初秋の敬老会にあたり、ご長寿のお喜びを申し上げます。

現在、入所者の平均年齢は八十三・三歳、最高齢九十九歳、平均在園年数は五十八・七年、最長八十四年に及びます。みなさまとそのご家族が発病から入所して今に至るまでの遥かな歳月の間に味わわれたご辛苦につきましては、私ども折りに触れて聞かされるお話から垣間見てはおりますが、そのすべては想像を絶しています。

そのなかで、みなさまをこのご高齢まで生かしめた力は、なによりも艱難辛苦を耐えたみなさまのご努力、そしてそれを支えられたご家族をはじめ親しい方々の連綿と続く愛であったでしょう。みなさまは多くを語られず淡然としてここにおいでですが、お一人お一人が秘めておられるご経験を想うとき、ただ心打たれ頭を垂れるほかありません。

さて、みなさまご承知のように、松丘保養園の森は今や青森市の中では貴重な自然となっていて、近隣の小学校から自然学習で生徒が訪れるようになりました。しかしリスも住むこの豊かな森はけっして最初からあった訳ではありません。入所者の方々がここ松丘保養園で生きた証のため、地域住民への感謝の思いを込めて、緑の森を残

したいとの構想のもとに計画的に植樹されたお陰です。

入所者のみなさまとそのご家族は、ハンセン病に対する偏見・差別を助長する誤った国の政策医療によって人権侵害を受けた被害者でありました。にもかかわらず、入所者のみなさまは一言の恨みつらみも言うことなく黙々と生き、その証を「松丘の森」として実現されたのです。この高潔な志と実行力に感銘を受けない者はいません。みなさまのこの松丘の森構想は、必ず今後の将来構想の根幹として受け継ぐべきものです。この秋にはまた元気な小学生たちが保養園を訪れるでしょう。この豊かな自然と入所者の優しさに触れた子供たちは、やがて松丘保養園の歴史を学び、自ずから人の尊厳について考えるようになります。松丘保養園は生きた人権教育の場になるのです。

入所者のみなさんはこのように将来への遺産を築きつつある宝のような方々であられますからこそ、様々な困難のあるご高齢の日々を憂いなく心安らかに有意義に過ごしていただけるように、わたしたち職員一人ひとりが尊敬の念を持って、心をこめて松丘保養園チーム一丸となって努めてまいります。私ども職員は自己実現のためでなく、何よりも入所者のみなさまの想いと願いを実現するための介助者、奉仕者、公僕としてここに遣わされているからです。

最後にあらためて、みなさまの益々のご長寿を祈ってお祝いの言葉といたします。本日はまことにおめでとうございます。

二〇一四年九月一〇日

ご挨拶

入所者自治会　会長　石川勝夫

会場にお越しの皆様こんにちは。

本日は敬老会にご出席を賜り誠にありがとうございます。

今年も、恒例の自治会主催による敬老会開催の運びとなりました。これもひとえに、入所者並びに施設関係各位のご理解とご協力のおかげと感謝申し上げます、

現在、松丘は、入所者数が一〇二名となり、その平均年齢が八十三・三歳、平均在所年数は五十八・七年となりました。今まさに松丘の主役は皆様です。皆様が元気にお過ごしいただいていることが、松丘の活力となります。

ここに皆様のご健康とご長寿を心からお祝い申し上げます。今日は、人権をも剥奪された施設の中において、療養生活を送られながら、これまで療友の為、またみんなの為に尽くしてこられた皆様に感謝し、ささやかながら、慰労をする日でございます。

長きにわたった強制隔離政策により、皆様それぞれの人生を総体として破壊されながらも、それらに耐え抜き、お一人お一人が人生を歩んでこられたことに対し、私達は敬意と感謝の念を抱かずにはいられません。

会場にご出席の皆様、そして、それぞれの事情により出席できなかった皆様、全て

の入所者が安心して豊かな療養生活を送ることができるように、入所者、職員みんなで取り組んでいかなければなりません。

皆様におかれましては、これからも益々元気にお過ごし頂きまして、私共に対するご指導と併せて、叱咤激励を賜りますようお願い申し上げます。そして来年も本日ご出席の皆様、また、本日やむなく出席できなかった皆様もこの会場でお会いすることができますように、皆様の御健勝を祈念申し上げます。

また今年、上寿、卒寿、米寿、還暦と記念の年をお迎えになられました方々に改めて、心より、「おめでとうございます」と申し上げまして、一言、敬老会にあたっての挨拶に代えさせて頂きます。

随想

一木一草（いちもくいっそう）あれやこれや（2）

―移転運動をやめさせた郵便局長さん―

滝田　十和男

この処、持病の糖尿病という難物に、脅やかされながらも、日々あまり変わりばえのしない、生活の流れの中で、ごく普通と言えば普通の日常を、享受できる幸せを、感じている昨日、今日の「時間」というものが、私にとって如何に貴重なものであるか、という事を、今回ほど強烈に感じたことはない。

と言うのは、とりたてて俄かに大きな変革が、あった訳でもないのに、昨日と変わらぬ今日があり、そして明日へと、時計の針が進むなかで、私を歴史的接点に立たせてくれたことに、とても大きな感動に揺すぶられるのである。

いま松丘保養園の入園者総数は百四人だという。くわしく紹介すれば治療棟内科の黒板に、表示されている人員は、男子四十七人、女子五十七人の合計が百四人となっている。

通年は大抵、医局の手厚い看護にも拘わらず、毎年十人前後の死亡者を、送り出さなければならない現状は、超高齢化社会の松丘にしてみれば、これも自然界のなりゆきとして、私たちは甘んじて受け入れなければ、ならない悲しい現実だが、今年はすでに四月まで五人の病友を送り出したその日から、在園者が百四人残され、現在に至っている事に、私は注目したいのである。

その注目の根拠をなすものに、松丘保養園が明治四十二年に創立されてから、今年でなんと百四年の年輪を刻んできて、しかも在園者総数と、ぴたりと合致するなんて、誰が予想したことであろう。これは単なる偶然な事と言えなくもないが、私はこれを偶然として片付けるには、勿体ない気がするのである。

この百四という数字はこの先、ぜったい交わることのない数であり、現在その数奇な位置の中に、生きていることの意味について、つい考えてしまうのである。

いま一番古い入園者は、昭和五年に収容された、九十七歳の千葉ナツヨさんを筆頭に、いずれも女性ばかり五人の方が、私より早く在園していて、永い風雪に耐えて生きている。そのうちの三人が松丘小学校での、私の同級生であることも嬉しい限りだ。

と言うことは、男性では私より先に収容された病友たちは皆、他界してしまい、私が九十歳という長命を与えられて、まだ現世の息を、吸いつづけていることの不思議さに、深く感謝の思いに浸るこの頃なのである。

私より一年遅れて収容され、少年舎の「若竹寮」に共に住んだ菊地盈、神子沢新八郎の両君も健在であることは嬉しいが、大方は戦争が終わってからの収容者がほとんどになった。

戦前の事をあれこれ述べても、今では遠い昔の事になってしまったが、療養所の年輪と共に、そこに生活する患者の生命にも、捨てがたい経験の重さみたいなものが、私の脳裏から付いて離れることはない。

松丘は地理的にも本州最北端の地にあり、一年の半分近くは永い冬期間の生活であり、名にしおう豪雪地帯であるところから、言葉にならないほど、寒さと降雪に苦しめられてきた。

私ばかりでなく誰の口からも昔はよく「なぜこんな寒い所を選んで療養所を建てたんだろうなー」なんて愚痴めいた声が出たものだ。

昭和四十年代になると、ブルドーザーで園内の主要道路の除雪が始まったが、それまでは、患者が朝の暗いうちから、寒風に吹きさらされながら「踏み俵」を履いて、四、五人が列を作って、柔らかく積もった雪を踏み固めて、雪路を作ってゆき、それは朝の配食前に必ず行う作業であり。それが無ければ全患者が朝食抜き、ということになるばかりか、容赦ない雪は踏み固めた後もまた降り積もり、ときには視界もままならぬ、猛吹雪に襲われることも暫々で、官舎地帯の区域までも、除雪作業のノルマとなっていたから、除雪作業に出た患者には、朝食だけは丼二つ、即ち二人前の麦飯が支給されるので

あった。

道路の雪踏みに限らず、患者作業のすべてが、雪と寒さとの戦いであった。特に今の給食棟になっている場所に、不自由者の住む「鳳鳴寮」があった。そこは高い土手の下に建てられていたために、吹雪になると西向きの玄関口が、雪で塞がれてしまい、通い看護が朝に出て来ても、部屋に入る事が出来ず、大きな声で叫んで部屋の人に窓を開けて貰って、そこから出入りしたなどということは、何も珍しい話ではなかった。

私が病棟看護に出されたときなどは、早朝に病人たちに顔を洗わせる湯を、炊事場まで貰いに行くのに、ズンベという藁靴を履いて、天秤棒で担いで湯桶を運んだものだ。病人のための湯沸かし設備も無かったのだ。

それどころか、病棟にはお風呂の設備さえなくて、週に一度だけタオルで病人の身体を拭いてやるのが、精一杯という時代だった。

私が収容された頃は、水道は敷かれていたが、水道管がむき出しのため、厳寒期には毎朝パイプが凍りついて水が出ない。そこで鉄瓶で沸かせた熱湯を掛けて、水が出るまで一騒ぎするのが、どの部屋でも慣れっこになっていた。昭和十年までは、直接井戸水に頼っていた時代が続き、患者地区に二つある、つるべ井戸の水汲みは、女性の仕事とされていたから、どんな厳寒の朝でも水汲み作業に出されて、凍りついたロープが、知覚の無い女たちの萎えた掌で、操るものだから真っ赤な血で染まったものだ。と老婆たちから聞かされたことがある。そうした時代は当然のように、患者たちに課された苦役によって、療養所は運営されてきたのである。

その上、「北部保養院」は昭和三年と昭和十一年の二度、施設が全焼するという、厄災に見舞われ、患者たちはその都度、筆舌に尽くせない苦難を強いられてきた。その際、内憂外患とも申すべきか、地元から激しい移転運動を起こされ、今日の百四年の歴史を刻むことなど、とても覚束ない危機的状況に陥った事もあった。

いま私の手元に当時の状況を伝える、昭和十一年十月二十七日付けの『東奥日報』の記事が、掲載されている古い資料を入手できたので、それを紹介してみようと思う。記事の標題は、

「多難の保養院　今度は地元新城村から
移転運動起こる」

去る二十二日未明の火事で四千四百余坪の大建築が烏有に帰し、損害四十五万円に達した東郡新城村に在る北部保養院、その出火原因が一時不審火とみられ、それから端を発して、内部に於ける患者間の対立やら奇怪な風評が伝わっている矢先、今度は地元民によって同保養院移転問題が台頭し、その運動は漸次具体化せんとしている。火災を契機にまさに『鳴動する北部保養院』の感がある。

理由としては、保養院が現在の位置に建てられたのは、今から三十年程前で青森市が今日の如く発展するとは夢想する事の出来なかった時代であるが、大青森市として発展しつつある今日、かかる建物が現在の位置に置くのは種々の点から考えて障害物たるを免かれぬ。

次に青森市発展と共に高貴な御方や外国の著名の士の往来頻繁になった。現在位置ではこれらの人々の目障りになる。

第三の理由、院外へ出て地元新城村付近の農作物を荒らしたり、その他種々の弊害が伴っている。というのであるが、近く村民一同の与望を集めて村会を開き協議の上、青森市、滝内村の有力者に呼びかけて、内務大臣宛てに保養院移転方猛運動を起こすことになったものである。

この移転運動は今回が初めての事ではなく、昭和九年夏も青森市長、新城、滝内両村長連署名で内務大臣宛に請願書を提出したが、内務省では受け付けたきり梨の礫の音沙汰がないので、請願側でもそのままにしていたものである。

その後患者は年毎に増え今後益々増加の趨勢にあるので、今回の焼失を機会として新城村で再び運動を起こすに至ったものである。

二十四日川村新城村長は語る

『これは何も患者を排斥するのではないのです。病人には同情するが、この際焼失したのを機会に一昨年陳情した既定方針で、移転運動を起こすことにしています。

現在の保養院の位置は保養院自体にしても、患者の身体にも悪いようです。夏は非常に暑く冬は

又極端に寒い。全くに適当した気候ではないのです。もっと暖かい南のほうの土地が良いと思います。この附近から生産される野菜、果物類はみな各方面でも注意を払って、心易く買ってはくれないのです。

石江あたりでは現在の所に設立される時には土地を寄付したりして賛成でしたが、今じゃどうにもならないので持て余しているやうな有様ですから、関係町村と相談の上、再び移転請願運動を起こす事に決定した訳です。

来年三月に建てるそうですから。余り急いではいません。来月初旬の村会で協議してから、青森市と滝内村に相談する予定です。』

少し長文になったが、当時の状況をリアルに知って貰いたくて、新聞記事の全文を紹介させて頂いたが、この根強い移転運動の背景には、いろいろな要素が、重なり合っての結果であることを、入園者の立場からも指摘してみたい。まず第一に、極度に貧しかった地元新城村の当時の一般村民には、経済的に何の恩恵ももたらさず、ごく少数の人が下級職員に、雇われる位が関の山だった。それに村民と患者の関係も余り芳しいものとは言えなかった。

患者の古老達から聞く所によると、大正六年に患者達は海が近いのに、給食に大根汁ばかりで、魚類は滅多に食膳に乗らないことに困り果て、『自分達で、院内の空いている草地を開墾して、野菜を作り、それを安い値段で炊事に納めるから、その分、魚を食べさせて—』と事務方に訴えたのが聴き入れられて、野菜作りを始めた。それが松丘の農園室の始まりだった。

だが、草地を開墾するに当たって、鍬も鎌も無い徒手空拳の彼等が取った行動は、近くの農家から必要な農具を盗み出して来る。堆肥にする干し草は、農家が飼い馬用に刈り上げたものを、一足先に頂戴して来る。その上野菜やリンゴとか、サクランボと言った果物まで、無断で掠めて来るに至っては、村民から嫌われるのも無理は無かった。

そんな状況が尾を引いて起きた移転運動であるから、院の当事者たちも追い詰められて、新しい適地を物色しなければならなかった。

夜半の火事で着の身着のままで、逃げ惑った患者

たちは、急遽、職員官舎と保育所の建物で、ぎゅうぎゅう寿司詰めの避難生活をして、大混乱の最中に、中條院長を先頭にして、移転先探しに奔走したという。

先ず八甲田麓の旧競馬場跡地や、夏泊半島の椿山などを候補地にあげて、実際に足を運んで見て歩いたが、何れも豪雪地帯のうえ、駅から遠く離れた辺境であるため、『患者たちをあんな不便な所に住まわせる訳にはゆかない』と、ほとほと困り果て、何の打開策もないまま、秋の深まりゆくにつれ、途方に暮れていた矢先に現れた、救世主とも言うべき一人の人物が居た。

それは当時の津軽新城郵便局長の蝦名九左衛門氏であった。

蝦名局長さんは、移転運動に強硬な村の有力者を訪ね回って『焼け出されて困っている病人たちを、追い出したなんて聞こえたら、村が末代までも恥曝しになる。保養院が在るから新城駅の人の出入りも多いのだし、郵便だって他村の局より取り扱いが何倍も多い現状だ。将来必ず保養院が在って良かった、と言える日がくるから…』と懸命に説得に当たった結果、あれほど強硬だった有力者たちも軟化して、ついに移転運動の旗を降ろすに至ったのである。

こうして北部保養院は移転から免れ救われたのである。蝦名局長さんの働きは、当時の患者たちの間でも広く知られ、お茶飲みの席などでも、良く話題になったものだった。

いま百と四年という療養所の歴史年数と、現在入園患者総数百四人と合致する偶然性も、蝦名局長さんのように、陰で尽力して下さる地元の支援者が居られなければ、生まれて来なかったに違いない。

私が今こころから願っている事は、今年いっぱいは百四という数字の合致点が、崩される事なく続きますように、と祈りを込めて、この稿を閉じたいのだが、果たしてどうなることやら……。

（平成26年7月記）

註＝東奥日報の資料は、同社の編集委員 菊谷賢 記者の提供になるものである。

思い出

山本信彦

私は青森県鰺ヶ沢町の出身で、十六歳から北海道の海で船に乗り漁師をしておりました。

いつの頃からか朝、顔を洗うたびに眉毛が抜けていくのでおかしいと思い家族に相談し、昭和二十五年、母親に連れられて保養園にきましたが入所者がいっぱいで入れませんでした。それから一年間実家で過ごし、翌年二十六年、再度来園しましたがまだいっぱいで自宅に戻されました。その次の年、昭和二十七年十一月四日に松丘保養園に二十歳で入園しました。面会所に二泊した後「和風六号」に入居することになりました。私が入園した時の保養園の様子をお話します。

国道沿いに保養園の正門があり、奥に進むと中門がありました。中門の手前右側には看護師の宿舎、園長官舎、その裏には職員官舎が続いていました。中門の内側は有刺鉄線でぐるりと囲まれていました。中門の前を東に行くと、現在のゲートボール練習場のあたりに中学校があり、卒業すると長島愛生園にある高校に進学する生徒もおりました。中門を入ると左側に番兵の小屋が、右側には保育園と看護学校がありました。更に進み、現在松丘会館があるあたりに洗濯干し場があり、丹前・敷布・襦袢など、たくさんの洗濯物が干されており、そこの一角の小屋の中で女性の入所者が包帯巻きを行っていました。洗濯干し場の右側に事務分館、面会所、花壇の倉庫が並んでいました。大きな桜の木があり、その奥の「七草」という建物は、入り口から入って左側が「甲田の裾」

編集部、右側が放送室で編集長もアナウンサーも入所者でした。

「七草」の後ろには天理教の教会がありました。その横に細い道があり、給食棟、風呂場、盲人会の建物と並んでいました。向かい側に、今もある栗の木の付近に掲示板が、現在の売店の所は自治会の二階建ての建物で、一階に書記、二階には部長がいました。自治会の奥には売店があり、そこも入所者が担当していました。

現在と同じ場所に記念塔がありました。記念塔の横を奥に行くと左側が「鳳鳴寮」「鳩鳴寮」、右側に「松花寮」「梅花寮」があり、パーマ、床屋の建物に続いて、「桜寮」「桃寮」「桐寮」と並び、公民館がありました。今の文化センターの所です。現在は無くなりましたが、ついこの間まで同じ名前の寮があったところに、二階建ての「和風寮」「静風寮」「薫風寮」と平屋の「恵風寮」があり、私は「和風寮」に入居しました。

保養園は外部から食品を買うことが出来ないのですべて自給自足でした。

記念塔の東側に鶏小屋があり、後に火事で焼失しました。現在の屋外訓練棟のところに豚舎・牛舎があり、牛は三頭おり入所者の牛乳は全部まかなうことができました。絞った牛乳を瓶に詰め、蒸気で温め、蓋をしてみんなに配りました。豚は百頭ぐらいいましたが一度豚舎が火事になり、死体は沼に捨てられました。

農人部の責任者がいて、入所者たちは二ヶ所の畑ですべての野菜を作っており、十時になると畑作業をしている人にはおやつが届けられました。梨・リンゴ・ブドウ・桃などの木を植えて果物を作っていましたが、大雪につぶされてその後は畑になりました。

食事は担当の入所者十三名で作っていました。缶詰に巻いてある紙を取っておき、くじを作り、朝、給食棟に行くと、米とぎ、御飯炊き、野菜洗い、味噌汁、調理、特食作りなどの担当をくじ引きで決めました。御飯は蒸気が来ているので、長い食缶のまま炊いて、出来た食事は食缶に入れ、夏はリヤカー、冬はソリに乗せて西と東に別れて

運びました。昭和二十九年から職員が給食を作るように変わりました。

今の福祉室が外科の治療場でした。その西側に手前から一病棟（女子病棟）・二病棟（男子病棟）・三病棟（結核病棟）と並び、二病棟と三病棟の間にケヤキの木があり、そこに解剖室がありました。

保養園には、比較的元気な入所者が、病弱の入所者のお世話をする「患者看護」がありました。病棟は各棟六人部屋が四部屋、個室が一部屋、真ん中に患者看護の詰所があり、患者看護をする入所者は一部屋に一人がついて、全部で五人おりました。ベッドは木製で、藁を敷き詰めた上に一枚布団を敷いていたため、床はホコリだらけでした。冬期間は各部屋に薪ストーブがあり、壁に薪を高くつんでいましたが、その後、石炭ストーブ、石油ストーブへと変わっていきました。

私が入園した昭和二十七年には二病棟の「患者看護」をし、昭和二十八年に給食で働き、昭和二十九年から豚舎で働きました。今でも忘れられない嫌だった仕事があります。それは火葬です。保養園の西側の奥に今も残っている栗林があります。そこにため池があり、現在「慰霊の塔」が建っている所に火葬場がありました。遺体を納めた棺桶（後に木工部で棺を作るようになった）を釜に入れて薪で燃やしました。朝九時から焼き始めて、夕方まで時間がかかりました。火葬担当の入所者が一人おり、もう一人は入所者が順番で火葬を行いました。誰もやりたくないので、部屋の順番で係がまわってきました。私にも二～三回まわってきました。今でも思い出したくないことです。昭和二十九年に職員に依頼されて家族の火葬をしたことがありましたが、その時に樽の竹がはじけて釜が一部壊れ、次第に使うことができなくなり、油川村の火葬場で火葬するようになりました。その後、個人で火葬することができなくなり現在の青森の火葬場で火葬をするようになりました。

もうひとつ思い出に残っている事があります。

それは昭和五十二年十月十四日の明仁皇太子殿下、美智子妃殿下の行啓です。青森国体ご臨席の為、青森に来県されたおりにお立ち寄りください

ました。入所者がみんなで竹を切り、白い紙に日の丸を書いてクルクル巻き付けて旗を作りました。当日は中門から売店まで両側に職員・入所者・保育園の園児達もずらりと並び、旗を振ってお出迎えしました。売店の前にテントが張られ、ご挨拶を受けました。それから寮廻りをしてくださいました。「はまゆり寮」の廊下に赤い絨毯が敷かれ、両殿下は入所者夫妻の手を握られました。握手をしていただいた入所者はみんなとても感激しておりました。その後、ナナカマドの樹をお手植えされ、お帰りになりました。

今はいい時代になったと思います。自由になったし、お金さえ有れば何でも食べることが出来るし、ほしい物も買えるようになりました。職員にはとても感謝しています。今のまま暮らしていけることを望んでいます。

ただひとつ、私は平成十年十一月十六日に弘前大学病院で角膜移植をうけましたが、その後だんだんと視力が低下してしまい、今は明るさが見える位です。もし出来る事なら、全く変わってしまった今の松丘保養園を一度自分の目で見てみたいと思います。

平成二十六年七月

短歌　白樺短歌会

散らさずに夏

滝田　十和男

アカシヤの咲き始めたる森かげにゲートボールの人ら競りあふ
久々に来しスーパーの店先に春を彩る花々並ぶ
鉢植えの棚にひときは眼を魅けば花の名も知らぬまま買ふ
わが庭の花壇に今日は集まりて奉仕の人ら花植えゆきぬ
高齢者慰安のバスも辞退して心電図採ると吸盤まみれ
朝毎に暦の日付確かめる癖となりたり物忘れして
徒らに日を送るがに見えながら乱れぬ脈を計られてをり
ポリープを見つけて切除されてより一年が過ぐ胃の検査なる
胃の中を写すカメラの動きまで画面に見せて異常なかりし

見学の看護学生ら真剣にわれの話をメモして行けり

百四年の歴史を刻む園に住む男女合わせて百四名なる

生まれたるその日の顔も写されて友の初孫のアルバム届く

嬰児を連れて来たればさっそくにスマホに写りみな笑顔なる

人見するまでに育ちてまるまると肥りたる掌の拳ふりあぐ

子も孫も連れて訪ひ来るありがたさ老い重ねたる身の幸せか

補聴器の集める音に庭の樹の蝉のひと際高鳴きをする

草丈の伸びる速さに驚くは部屋に籠りし間の五日目に

老い耳の助かりてをりこの頃は字幕放送のテレビ増えきて

暇あれば自動按摩機に乗る癖のつきて癒しの時を貪る

耳萎えの二度も三度も聴き返す三度目はやや高声になる

窓際に並らべし鉢に咲く花の季過ぎてまで散らさずに夏

米寿を迎えて

三浦　喜美子

平成二十六年六月十三日午前九時三十分、甥の運転する車に乗り、一路故郷へと向かいました。

甥は大学受験に失敗し上京してから、会社勤めをしておりましたが二年前に定年退職し、今は週三日働いているとのことです。

三、四ヶ月前より甥の兄姉とで話し合い、私の米寿のお祝いを、と考えていた様でした。又、甥の中学校の同級会も故郷であり、その開催日にも合わせているとの事でした。

甥は松丘保養園も青森県に訪れるのも初めてです。

六月十二日、仕事を終えたら、最終便の飛行機で青森空港に到着。バスで市内のホテルまで行き宿泊。翌日レンタカーを借りて行動するとのことです。初めての道でもカーナビが付いているので安心とのことでした。

故郷までは、道中休みをとりながらホテルに向かいました。妹、甥、姪、十人程招集されて待っていました。記念品、花束の贈呈があり、驚きと感激で一杯でした。

皆、定年退職したとは言っても働いている身、よくぞ私のために集まって頂いたと、嬉しさの中にも申し訳ない気持ちでした。

翌日は午前十時に皆さんと別れ、私達（妹、姪、甥）は、今は亡き次女の家が去年新築したので、招待を受けており、お祝いに行きました。

その晩は実家に泊まりましたが、ホテルとは違い、

生まれ育った我が家は、いくつになっても懐かしく、心が休まり、賑やかな楽しい夜を過ごしました。

甥は翌日同級会に出席のため、朝食後出発しました。私も同級会があり、午後三時の集合でしたので、ゆっくりと会場へ向かいました。

十人ほど集まると聞いておりましたが、急に二人が体の具合が悪くなり欠席になりました。男性三人、女性五人でした。現在同級生は二十名（男性八名、女性十二名）ですが、いざ出席となると十人足らずです。

少人数でも楽しく、時間の経つのも忘れる米寿の祝会でした。

今年は昭和二年生まれの方のお祝い、昭和三年生まれの同級生が四人もおり、来年も米寿のお祝いをする事になりました。その後は長く続いた同級会を解散することになりました。すると、一人の女性が、その後は女性だけでも集まり、楽しい一日を過ごしたいと言いだし、残りの方々も同意しました。私にも是非参加するように言われましたが、返事は出来ませんでした。九十歳になり、汽車を乗り継いで帰る体力も気力も私には残っていないのです。

同級会に参加して私は、二、三年前より感じていたことがありました。二十代でハンセン病になった我が身は腰や足の痛みがあり、各種の薬も服用しておりますが、健常者の方達は血圧の薬は服用しているが他はどこも悪い所が無いとの事。背中は少し丸くなった感があるが若々しく、今は朝四時に起きて畑に行き、若い方々（息子夫婦）が出勤する前に帰り、ゆっくり朝食をとり、ある時は近くの友達の所に遊びに行き、又ある時は友達が来て楽しく過ごし、昼寝をし、午後三時頃には家の廻りの草取りをし、気楽な日々の様でした。

私は退園したい一心で注射は一日二回、飲み薬一日三回と服用しました。若い時は、あまり感じませんでしたが、健常者の方達の肌の色とつやは年と共にその差が広がった様に感じております。同級会の翌日は妹の家に泊まりました。

翌朝十時頃、来年の再会を約束し、私は迎えの車でホテルを後にし、末の妹の家に向かいました。

下の妹が来ており、その晩は妹達と楽しく過ごし、幼い頃の思い出話で夜が更けていきました。

さ、次の日（5日目）は、甥の車で妹、姪の四人

で浅虫温泉へと向かいました。午後二時半にはホテルに入り、ゆっくりと休み、疲れを取ることにしました。部屋に食事が運ばれてきて楽しくゆっくり、海を眺めながらの夕食は最高の贅沢でした。

甥は、主人も一緒にレンタカーに乗って浅虫へと、誘ってくれましたが、主人はゆっくり家で休んでいた方がいいと同行しませんでした。

翌日私を部屋まで届けて、すぐ帰りました。その日は姉の家に泊まり、八日目で甥は東京へ帰りました。ご苦労様でした。本当にありがとうございました。

私は帰って二、三日は元気でしたが、その後疲れがドッと出ました。足首が腫れて来て、身体全体がだるく、食欲もなく、三日程寝ましたが、それでも快復せず早寝遅起きでした。車での行動は楽かと思っておりましたが、いかんせん年ですから仕方ありません。

甥とは初めてのドライブでしたが、なんと楽しかった事か！帰りは四人でその賑やかな事。私は一生忘れる事の出来ない楽しい楽しい米寿の年となりました。先祖、祖母、両親、兄夫婦のお墓参りも出来、心残りもなく、今後は日々を大切に残り少ない人生を過ごしたいと念じております。

改めて、妹、甥、姪達に感謝申し上げます。

余談ですが……

昭和二年八月二十四日　生まれ
昭和二十六年二月六日　松丘保養園入園
昭和三十七年九月四日　退園
平成十二年六月二十六日　再入園
平成二十六年六月十三日　米寿（お祝いをして頂く）

こうして数字を並べて見ると、なんと二と六の数が多いことに気が付きました。旅立つ時も、二か六のつく日ではないかと苦笑いしております。

もし生まれ変わる事が出来るのなら、先ず健常者でありたい。それにこの家、この両親の子供でありたい。又、この部落の一員として生きたいと思っております。

野の花の微笑(ほほえ)み

比良信治

（10）ふるさとに帰った銀じいさん

年が明けて一月末頃の日曜日の朝に、文太郎に電話が入った。遅い朝食が終わったころであったが、電話の声は青森の国立松丘園の交換手であった。もしや母に急変が起きたのかと思って、一瞬緊張して受話器を握った。

「もしもし、私は園長の白木です。お休みのところに電話しましたのは、お願いがあってかけましたの。お母さんのことではありません。お母さんは大丈夫ですよ。

実は小樽出身の豊岡銀蔵さんのことでお電話しましたの。—」

眼鏡をかけた丸顔の庶民的な園長の顔が、文太郎の頭の中に浮かんだ。身体はやや小太りで、ゆっくり歩くタイプの白衣の園長の声は、思ったより澄んだ声であったが、どことなしに東北弁の訛りが時々現れていた。

園長のお願いという内容は、かいつまんでまとめると、年が明けて豊岡銀蔵さんは満七十歳になった。療養所にお世話になって約四十年余りになる。病気もおさまったし、銀じいさんの姉がふるさとに還ってこいというので、その気になったという。姉の長男夫婦が正月休みに見えて、子供もいないその長男夫婦の家に厄介になることを決めたという。しかし、長男夫婦はパン屋をやっていて、昼間は夫婦とも家を出て店で働いている。そこで車椅子の銀じいさんの色々な相談相手になって欲しいということだった。

園長は、文太郎が老人ホームの職員であることを知っていて、市役所の担当係や地域の老人クラブや老人集会所などにも紹介して、銀じいさんのお世話役に

なって欲しい、という依頼だった。
ハンセン病元患者の社会復帰は珍しいことだと思った。自分の母親をふるさとに迎えたいが複雑な病気を抱えてあきらめているが、地元の出身者の復帰には、文太郎も大歓迎で承知した。銀じいさんの受け皿となる豊岡家の姉さんやその長男夫婦とも近々お会いすることを約束した。
文太郎は、母からも豊岡銀蔵さんという小樽出身者がいることを聞いていたが、一度だけ園の誕生会のときにお会いしたことがあった。母たちの話を総合すると、小樽の古い港町の出身で、親は潜水夫で、特に小樽築港や小樽港船入澗埠頭をつくる仕事の潜水夫となって働いていたという。銀蔵さんは父の職業をきらって漁業の漁夫として働いていたが、二十五歳になって大阪に出て、金まわりのいい建設労働者として働いたという。その二十代の後半に大阪医大の診察でハンセン病に罹っていることが判明し、岡山県の長島愛生園に強制入所させられた。そこで病気を抑える治療をして、数年たって郷里に近い青森の松丘園に転入したのである。青森の療養所に移ってからは、年に一回位はふるさとに帰って、今は残る姉やその身内の者と接触してきた。しかし、銀蔵は五十代に入って、右下肢が不自由となり。車椅子を使う身になっていた。
地域の商店街の一角でパン屋を経営する豊岡夫婦と、次の日曜日に店でお会いした。
『港のパン屋泉堂』の横一文字の看板が玄関口の上に掲げられていた。巾二間、奥行き一間半位の小さな店であったが、商品ケースには各種のパンがぎっしりと入っていた。
お店の背景には住宅街の奥に中学と高校があり、バス通りには金融のお店や各種商店が並んでいた。このパン屋は、銀じいさんの姉夫婦が四〇年以上も経営し、長男夫婦が引き継いで十五年と続いている馴染みのパン屋さんだった。
銀じいさんの姉の主人がパン工場を山の手に造り、その売店を姉が中心になって経営していた。パン工場は別な人が運営し、今は長男が工場からパンを毎日仕入れて販売するのである。
このパン屋の目玉商品は、銀じいさんの姉の松江さんが開発した『サラダパン』であった。サラダパンの具はポテトである。北海道産のイモを茹で上げる。味付けはマヨネーズに塩、酢、卵、サラダ油をまぜて作る。その後、長男夫婦が、イモの他、ニンジン、タマネギ、グリンピースも混ぜるようにして今日のサラダ

が出来上がった。お客さんが言うには、「少し甘めのコッペパンとポテトサラダの相性が良くて、素朴な味わいが忘れられなくなる」という程の評判の高いサラダパンになった。亡くなった松江さんのご主人との合作の味付けだった。それを長男夫婦が受け継いでいるのだ。会社勤めの女性たちは、このサラダパンは、「働く心を癒してくれる味だ」と評判が高かった。

文太郎はどこからとなしに、サラダパンの評判を聞きつけていたが、食べるのは初めてであった。口に入れてみると、どことなしに「おふくろの味だ」と思った。

銀じいさんは、この長男夫婦になにがしかの受け入れるための資金を渡し、パン屋の経営を支えようという気持ちが受け入れを決めたようである。

しかし、問題は夫婦は朝早く出勤し、店を閉めて自宅に帰るのは、早くても夜の七時頃だという。この昼間の長い時間を銀じいさんはどうやって過ごしていくのか。長男夫婦はそこまで考えていないで引き受けたようだった。

文太郎は、そこの点について問うても、何とかなるだろうという考えなのか、曖昧なものしか聞こえなかった。

文太郎は、銀じいさんが収入源を持っているならば、市と話し合い、文太郎の高齢者ホームに入居することも可能である。姉や長男夫婦は銀じいさんの所持金を目当てにしているのか、自宅に住まうことを強調されていた。やがて四月に入った。銀じいさんが松丘園を退所する日時も発表された。文太郎は改めて、白木園長からも電話をいただいたので、千歳空港まで出迎えることにした。

青森空港から、甥の豊岡義一さんと車椅子に乗った豊岡銀蔵さんが夕方千歳空港に入ってきた。空港ターミナルで銀じいさんにご挨拶すると、笑顔で「お世話になりますな、よろしくね」と、声がかかった。

車椅子の老人を毎日お世話している文太郎は、銀じいさんの車椅子を押して、空港内の駐車場に向かった。甥の義一さんのライトバンに乗って、三人は夜の高速道路を走って、ふるさとの小樽に向かった。文太郎は小樽市内に入ると間もなく下車してお別れした。豊岡さんの家は港の西側の手宮の一角にあった。四、五日してから、手宮の自宅に伺うことを約束して別れたのである。

文太郎は車椅子の銀じいさんの支援について考えた。迎えいれた豊岡さんは、何とかなるだろうと思ってい

た。朝早く朝食を済ませると、豊岡さん夫婦は港町のパン屋泉堂に出かけて、夕方遅く帰宅する。この夫婦は銀じいさんの昼間の生活の面倒を見ることを考えなかった。自分でやるだろうと思っていたようだ。

銀じいさんも、生まれ変わったような気分で、帰ってきた翌日から、まず住宅の廻りを車椅子で歩いてみた。手宮の漁港が見える高台であった。遠くに高島の日和山灯台が見え、広い小樽港がかすかに見えた。昔からの粗末な住宅が多かった。近くに小学校があって、そこのグランドで銀じいさんも少年時代に野球試合をやったことがあった。しかし、銀じいさんの小学校は手宮の方にあった。だから、銀じいさんが生まれた地区は高島港の近くで、父は長く潜水夫の仕事をやり通したのだ。その両親も亡くなり、その近くに姉のサトが一人で暮らしていた。

銀じいさんは、大阪で働くようになって嫁をもらったことがあったが、正式な結婚ではなかったので、長島愛生園へ入院するときに、その女性と別れてしまった。療養所へ入って多くの男女が結ばれて結婚生活をしているが、銀じいさんは何故かひとり暮らしを続けてきた。

「女はきらいじゃないが、病人同士じゃねー」と笑って答えるのみだった。

銀じいさんには、女性問題は全くなかった。そうかといって趣味もなく、強いて言えば俳句の会に顔を出したくらいで、俳句は一句も登場しなかった。あとは、映画会や踊りの会には興味があったが、車椅子生活になってさらに狭くなり、やがてふるさとへ帰ることが唯一の希望となり、その実現を見たのである。

らい予防法が廃止になってから、政府から何がしかの手当をいただいた。これは思いがけない財産となった。さらに、毎月傷病手当が政府から出るようになったので、銀じいさんの里帰りは多くなったことは事実だった。しかし、車椅子生活で、七十歳を超えると、働くことも出来ず、どうやって暮らすかと、彼自身も悩んでいた。

雪どけの後の町を歩いても、見ることも出来ず、ある日タクシーを利用して市内を見て歩くことに気が付いた。電話をかけて、車椅子であることを承知の上で来てもらった。

しかし、タクシーの運転手さんに車を降りて案内してもらうことが出来ないことを悟った。そこで、オタモイ育成園の佐久間文太郎さんに電話した。

「市内の各地を案内してくれる人を探して欲しい」と

お願いした。
文太郎は待っていましたとばかりに喜んで応じることにした。実は、育成園の小林園長には、豊岡銀蔵さんのことを報告し、支援方法も相談していた。結論は出ないが、施設に来るボランティアグループの主な人々とまず相談してみた。すると彼の居住地の町内会に相談すること、そして広く市内にも呼びかけて支援ボランティアを見つけようという考えだ。それよりも、園長からは、福祉団体に呼びかけ、銀じいさんの歓迎を兼ねた報告会をやり、ハンセン病問題について、本人からも体験を語ってもらい、文太郎からも元患者の実態を述べ、帰ってきた銀じいさんの支援を呼びかける市民集会を計画することになった。
福祉団体が主催して計画が立ち上がっていたところに、銀じいさんから電話が入ったのである。
文太郎がかけつけて行くと、銀じいさんは、その市民集会に賛成だった。人前でしゃべったことはなかったが、自分のことをお願いし、多くの元患者がふるさとに帰れない悩みを訴えて、理解してもらいたかった。
文太郎は、その集会のあとに銀じいさんの支援サポートする市民を募集することも了承してもらった。
文太郎は、小林園長に報告し了承してもらうと、市内の福祉団体の代表の方々を訪問し、集会の参加を依頼した。やがて、新聞やテレビ会社にも依頼し、四月下旬に、「銀じいさんを支援する市民集会」が、市民ホールで開催されることになった。
市民ホールは、小樽運河の近くにあった。当日、施設の車を出してもらい、文太郎は銀じいさんを迎えて会場に向かった。銀じいさんは、
「えらいことになってしまって、あんたにはお礼もできないほどですよ。感謝いっぱいですわ。」と、車の中で文太郎に頭を下げた。
「とんでもありませんよ。ぼくのおふくろのこともあるし、市民にハンセン病問題を理解してもらうには、本当に良い機会だと思いますよ。銀じいさんが決心して小樽に帰らねば生まれないことですよ。ぼくたちはあなたに感謝し、できるだけ支援し、協力をしたいのです。心配しないで下さいよー」と、続けて、
「ところで、自分の体験談をお話できますねー」と尋ねると、
「原稿ちゅうもんは作れんが、思い切って体験をぶちまければいいんでしょうがー」
「ぶちまけてくれればいいんですよ。ところで、パン屋の義一さんは見えますかね？」

「やっこさんも時間に間に合うように見えますわー」と、銀じいさんは微笑んだ。

市民ホールの大集会室は、ほぼ二百人近くでいっぱいになった。司会は、障害者施設団体の佐藤さんが当たり、開会挨拶は代表してオタモイ育成園の小林園長が述べた。ついで、佐久間文太郎が、はじめに静かにお話をはじめた。

「ハンセン病患者の息子として皆さんに訴えたい、お願いしたい」と題して六十分お話した。

ついで、豊岡銀蔵が、両眼を開いて聴衆を睨むように登壇した。

「ハンセン病ってどんな病気か、知っておりますか？元気でふるさとに帰った銀じいさんを助けてほしい」

銀じいさんは、

「病気は怖いものじゃない。日本の警察や特定の医者が怖いものにしてしまったのです。わしは、元気にふるさとに戻ってきた。病気は三十年前に治っておった。それが、中々ふるさとに帰さなかった。日本には今は一人も病者はおらん。ハンセン病を好きな医者や役人が勝手に元患者を帰さないように縛り付けておる。わしは七十歳を過ぎた。四十年間も病舎に閉じ込められていた。ふるさとの町を歩いて、楽しんで死にたくて帰ってきたんだ。わしには家族もおらんので、どうか、心ある市民の方々のご支援をいただいて、あたたかいふるさとで死んでいきたい。お願いします。」

会場内に割れるような拍手が波打った。

銀じいさんは疲れたのか、うなだれて車椅子に座ると、脇にいたパン屋の豊岡義一さんが代わって頭を下げた。

「おじさんを助けたくて、青森から迎えました。わたしら夫婦はパン屋泉堂で暮らしていまして、昼間は叔父を助けることが出来ません。どうか心ある市民の方々のご支援、ご協力を何とぞよろしくお願い申し上げます。」

豊岡義一さんは深々と頭を下げた。

「みなとのパン屋がんばれ！」「サラダパン屋がんばれ！」などという声が会場内からあがった。義一さんは、立ち上がって声の主の方に向かって頭を再び下げた。

市民ホールの道ばたには、黄色の小さな花々が咲き競っていた。その小さな五枚の花びらを、三枚のハートの葉が寄せ合って連なっていた。カタバミの花だった。

（つづく）

人事異動

【転　出】

副看護師長　三浦由理子
（八雲病院看護師長へ昇任）

【昇　任】

副看護師長　古屋由美子（看護師より：病棟勤務）

【採　用】

《定員内職員》

看　護　師　工藤奈津子（病棟勤務）

《期間業務職員》

看護助手　佐藤智加子（中央センター2階）

看護助手　工藤　幸子（病棟）

（以上平成26年5月1日付）

《パート職員》

看護助手　倉内　真紀（盲人会）

（以上平成26年5月7日付）

《期間業務職員》

看護助手　野呂　文枝（第2センター）

看護助手　三浦　久美（病棟）

（以上平成26年6月1日付）

【退　職】

看護助手　鎌田　幸弘

（以上平成26年6月30日付）

看護助手　佐藤　紀子

（以上平成26年7月31日付）

【採　用】

《定員内職員》

看護助手　中村美由紀（賃金職員より）

（以上平成26年8月1日付）

《期間業務職員》

看護助手　中村　牧子（中央センター1階）

（以上平成26年8月15日付）

☆ 松丘のニューフェイス紹介 ☆

五月から当園で働いている新人の方々の紹介です。どうぞよろしくお願いします。

（アイウエオ順）

① 勤務場所
② 今、熱中していることは？
③ 一言挨拶

工藤　幸子（くどう　さちこ）

① 病棟　看護助手

② 仕事

③ 5月1日から病棟に配属になりました工藤幸子です。先輩方のご指導のもと、学ぶ楽しさを日々実感しております。信頼される介護が出来る様がんばります。

工藤奈津子（くどう　なつこ）

① 病棟　看護師

② 家庭菜園

③ 5月から病棟に配属になりました工藤です。まだまだ不慣れですが、入所者の方が安心できる看護ができるようがんばっていきたいと思います。よろしくお願いします。

倉内　真紀（くらうち　まき）

① 盲人会　看護助手

② 娘の衣装づくり（娘は豊田児童センター一輪車クラブのスターメンバーです。）

③ 5月7日より盲人会に勤務している倉内です。初めての職種で学ぶ事が多い毎日ですが、笑顔でがんばりたいと思いますので、宜しくお願いいたします。

佐藤　智加子（さとう　ちかこ）
①中央センター2階　看護助手
②観葉植物の育成
③入所者様より松丘保養園の歴史等いろんな話を聞かせて頂き、勉強になっています。今後も沢山の事を学んでいきたいと思いますので宜しくお願い致します。

中村　牧子（なかむら　まきこ）
①中央センター1階　看護助手
②仕事を覚えることに一生懸命です。
③中央センター1階に配属になりました中村です。早く仕事を覚え、入所者の方が快適な生活を送れるよう、がんばりたいと思います。宜しくお願いいたします。

野呂　文枝（のろ　ふみえ）
①第2センター　看護助手
②仕事に熱中しています。
③6月より第2センターで勤務になりました野呂です。北海道育ちで津軽弁に少々不慣れなため御迷惑をおかけしているかと思いますが宜しくお願いいたします。

三浦　久美（みうら　くみ）
①病棟　看護助手
②ガーデニング
③ここ松丘保養園で働けることに日々感謝し、入所者様や患者様の、少しでもお役に立てるよう、精一杯勤めて参りたいと思っております。よろしくお願いいたします。

自治会日誌　○印　自治会

四月中

1日○4／1付転入、採用職員　挨拶に来訪
3日○青森県健康福祉部保健衛生課　渋谷憲司氏、外2名挨拶に来訪
〃　○第75回定期支部長会議へ出席の為、石川会長出張（～5日帰園）
10日○園幹部と執行委員顔合わせ
11日○第14回執行委員会
15日○甲田の裾編集局企画運営会議
〃　○地区連絡係定例集会
16日○第32回園内クリーン運動
18日　歌っこ広場
20日○女　七十八歳逝去　青森県出身
22日○男　九十歳逝去　秋田県出身
24日○5／1付転出　三浦副看護師長　挨拶に来訪
25日○平成26年度観桜会
30日○第4四半期自治会会計業務監査（～5／1）

五月中

1日○5／1付採用職員3名　挨拶に来訪
8日○保健科運営委員会
9日○第15回執行委員会
〃　○北海道保健福祉部　岡本収司主幹、外3名来訪
10日○第16回執行委員会
13日○全療協会長　神美知宏氏のお別れの会に石川会長が出席（～14日帰園）
15日○地区連絡係定例集会
16日　歌っこ広場
〃　○第17回執行委員会
21日○第30回（平成26年度）歌謡交流大会
31日○青森ロータリークラブボランティア来園、花の苗植え活動を行った

六月中

1日○第17回春季親善交流ゲートボール大会
2日○6／1付採用職員2名　挨拶に来訪
4日○平成26年度高齢者慰安バスレク（大鰐町鰐カム）
5日　第2センターとの話合い
6日○第18回執行委員会
10日　人事院職務調査
〃　新城中学校白樺美術館定例コンサート
11日　中央センター2階買い物ツアー（ガーラタウン）

11日○五所川原市立高等看護学院47回生　施設見学
　の為来園、石川会長が講演
12日○地区連絡係定例集会
〃　○真宗大谷派　本田氏来訪
13日　全国国立病院看護部長協議会等支部合同会議
　（札幌）
16日　青森県庁ハンセン病パネル展
〃　○新城小学校1年生来園（校外学習）
17日　一般寮交流会（五所川原エルムの街）
18日　中央センター1階との話合
〃　第1センター買い物ツアー（ガーラタウン）
〃　○支部代表者会議・議懇総会・「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典・「全療協神会長、全原協研会長の合同偲ぶ会」に出席の為、石川会長出張（～22日帰園）
20日　らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日
〃　歌っこ広場
23日　中央センター2階との話合い
〃　○第19回執行委員会
〃　○皮膚科医師　尾崎元昭先生来訪
26日○消防訓練

30日○真宗大谷派奥羽教区との交流会で石川会長が講演
〃　○本部機構等検討委員会に出席の為、石川会長が出張（～7／2帰園）

七月中

4日　全国国立病院院長協議会第1回北海道東北ブロック支部総会（札幌）
7日○第20回執行委員会
〃　○不自由者棟入居者慰安（七夕祭）
10日　新城中学校定例コンサート招待
〃　○官房長官と統一交渉団との面談の為、石川会長出張（～11日帰園）
〃　○保健科運営委員会
12日○札幌弁護士会人権擁護委員会一行が来園、懇談会に石川会長が参加
14日○青森県健康福祉部　一戸和成部長、外3名挨拶に来訪
17日○地区連絡係定例集会
18日　歌っこ広場
24日　職場環境清掃
29日　第11回ハンセン病に関する青少年研修（～31日）

29日○国立ハンセン病資料館　金学芸員来訪
30日○男　八十七歳逝去　秋田県出身
〃　○第21回執行委員会
〃　○北海道はまなすの里・北海道による「第11回ハンセン病に関する青少年研修（7／29～31）」で石川会長が講演
〃　○第32回（平成26年度）納涼祭
31日　岩手県慰問

八月中

4日○第22回執行委員会
6日○県の招待により青森ねぶた祭を観覧
8日○江渡上町子供会一行が交流の為来園
15日　歌っこ広場
〃　○「職員定員問題に関する合意書の調印式」に出席の為、石川会長出張（日帰り）
18日○8／15付採用職員1名、挨拶に来訪
〃　○地区連絡係定例集会
19日○第23回執行委員会
〃　○笹川記念保健協力財団　喜多悦子理事長、外2名来園
22日　秋田県訪問
27日○第1四半期自治会会計業務監査（～28日）
28日○田村厚生労働大臣と統一交渉団との面談、支部代表者会議に出席の為、石川会長出張（～29日帰園）
30日○東北学院大学経済学部5名来園、石川会長が講演（～31日）

編集後記

◇毎年夏休み前後は来園者が多い時期であり、本年も沢山の方達が当園を訪れました。近隣の江渡上町会子供会一行は、すぐ近くに住んでいながら保養園の中に入るのも初めてという方も多く、大人から子供まで熱心に講演に聴きいっていました。クリーン運動やロータリークラブの花苗植え、新城小学校の自然観察など、本年は緑に関わる訪問が多数ありました。

かつて、社会と園を隔てた森が、今社会交流の一助になっているとは、先人達は思いもよらなかったことでしょう。これからの季節は、是非、納骨堂近辺での紅葉狩りに訪れて、入園者と気軽に触れ合って欲しいと思います。（佐藤　勝）

園内の出来事

○5月31日
青森ロータリークラブ
ボランティア来園
花の苗植え活動

入園者が見守る中、ラベンダーや
チューリップの球根を植えた後、
昼食を挟み川西園長の講話がありました。

○8月8日
江渡上町会子供会一行
草取りを兼ねた園内見学

あいにくの天気で草取りはできません
でしたが、入園者のお話、園長先生の
お話を聞き、保養園の歴史を学びました。

○７月30日　第32回納涼祭り

子供会ねぶた、婦人部の流し踊りで祭りを盛り上げます。

今年は10年ぶりに花火が復活。
思わぬ演出に拍手喝采。

○８月６日　ねぶた祭り招待

この日は全ねぶたがビニールカッパを着て出陣！

恒例の三村知事とのユーモア溢れる懇談会。

祭りも佳境に入った頃降り出した雨だが演者と観客はものともせず、祭りを盛り上げた。

松丘の樹木を語る　その2

保育園前の花壇について

テーマは「人の縁と縁が結び合い、心の核心を見つめ合おう」です。

壮大なテーマなのですが、是非とも表現したいと思いましてデザインに反映しました。この花壇は3つの円で構成されております。大きな円の中に小さな円が2つ…

大きな円の意味は、京都にあるお寺さん源光庵（げんこうあん）さんのお庭を参考にさせて頂きました。

このお寺さんの天井板は伏見桃山城から移築したもので、一六〇〇年（慶長五年）に徳川家家臣鳥居元忠らが石田三成に破れ自刃した時の跡が残り、血天井となっております。

その脇に丸窓と角窓があり、それぞれ悟りの窓、迷いの窓と呼ばれております。（上右写真参照）

私も最初この庭を訪れたとき、この窓がどのような意味を表現しているのか解りませんでした。この庭に関する解説書も無いので、適切かどうか解りませんが、私なりの解説をすると、モミジを四角い窓（迷いの窓）から見ると、人の心理では窓の四隅を眺めどこかのこの風景のあら探しをしています。

次に丸い窓（悟りの窓）からモミジを見ると視線が中心に集まり、何の詮索も無くただ美しいモミジに目を奪われます。

この庭を2つの窓から見せている意味は、きっと物事の核心をつく目を持ちなさい、という意味だと思いました。

今回作った花壇には、2つの円（縁）を1つの線でつなぎ、大きな円の中に納め「何の詮索もなく人と人が縁で結ばれますように」という願いを込めました。

（樹木医　逢坂　淳）

昭和五年十二月十日創刊
平成二十六年九月発行　第八十五巻　第三号　通巻六八二号

松丘保養園

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で105年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地　青森市大字石江字平山十九
園　長　川西健登
保有敷地　二三〇、五四八平方米（六九、八六三坪）
建て面積　三〇、三五八平方米（九、一九九坪）
延べ面積　三六、〇三六平方米（一〇、九二〇坪）

交通案内

□電車の便
1．東北新幹線・新青森駅下車（車で約3分）
2．奥羽本線津軽新城駅下車（車で約5分）

□バスの便
1．青森市営バス西部営業所行
2．弘南バス浪岡・五所川原・黒石行き　共に松丘保養園前下車

□航空機の便
青森空港より（車で約30分）

□高速自動車道の便
青森ICより（車で約5分）

□なお保養園に隣接して桜の名所三内霊園（1㎞）と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館（2㎞）等があります。

発行所　一般財団法人　松丘保養園慰安会
所在地　〒〇三八―〇〇〇三
青森市大字石江字平山十九番地
電話　(017)(788)〇一四五・〇一四六
発行人　川西健登
編集人　甲田の裾編集委員会
印刷所　青森市本町二丁目十一―十六
青森オフセット印刷株式会社
電話　(017)(775)一四三一番